

# 図書館だより

No.70 July, 2007



私の一冊で紹介された図書の表紙

## 目次

巻頭エッセイ「1冊のポケット本」がある	一般理科	宮本 泉	1
読書のすすめ 鏡の中の物理学	電気電子工学科	宮崎浩一	2
読書のすすめ 読書で得られる幸福	制御情報工学科	小田幹雄	3
読書のすすめ 十代後半の頃の読書	生物応用化学科	松田貴暁	4
読書のすすめ 創造の世界へ	材料工学科	周 致霆	6
読書のすすめ このままクルマに乗り続けていいのか ——『レスター・ブラウン・プランB2.0』を読んで——	一般文科	岡本和也	7
私の一冊	各学科学生6名		9
リレー連載「天気図を読む」	機械工学科	石丸良平	10
平成18年度図書館利用状況			12
Information 編集後記			13

Kurume National College of Technology library  
久留米工業高等専門学校図書館



の中での疑問は心地よくも篤い。

これぞ、疑問 = 興味 = 発想 = 創造と変化する心揺れる青春 “How to Stay Young” であろう。

このように自らの中に疑問や興味をそそる事を意識し、持つことで発想や創造の“種”が出来る。

この種が何時しか、またどのように芽吹き開花するか分からないが、人生を楽しくしかも豊かにしてくれるのは間違いないと思われる。その種を持つ為にも、そして大きく芽吹かせる為にも多くの文字に触れる事や、様々な視聴覚情報を得ることは非常に

有意義である。

また、様々な芽吹く種を持つ方法として最近の電子情報だけではなく、古典的ではあるが不変の手法である読書は大切である。

その際、気に入った一説や語句でもあれば、黙読だけではなく声を出して音読しては如何だろう。必ず心に残るものがあるはずす。

そのような思いを巡らしながらセピア色のポケット本をめくった。

## 特集 読書のすすめ

# 鏡の中の物理学



電気電子工学科 宮崎 浩一

もう17年程前になりますが、私が学生のときに、その考え方に非常に衝撃を受けたものの一つが「量子論」や「相対論」といった物理学です。私は電気工学科に所属していましたが、専門基礎科目で「力学」や「量子力学」を学ぶ中で、「量子論」や「相対論」といった物理学、目の前にある世界では考えられない非常識な物理法則に非常に興味をもち、これらに関する本を図書館などで探して読んで覚えがあります。その中でも、これらの学問の考え方の基本が日常的な現象を通して分かり易く説明してある本、朝永振一郎著「鏡の中の物理学」（講談社学術文庫）を皆さんに紹介します。

この本は3つの章で構成され、「鏡の中の物理学」の章では「相対論」について、「素粒子は粒子であるか」と「光子の裁判」の章では「量子論」について、日常的な現象を比喩的に多くとりあげて、分かり易く説明してあります。

「鏡の中の物理学」の章では、まず、鏡を映った物理現象は実際の現象は同じ法則に従うかという問題を提起するところから話が始まります。そして、左

右が逆になる普通の鏡に加えて、時間の流れが逆になる鏡、素粒子において粒子が反粒子、反粒子が粒子として映る鏡、これら3種類の鏡を用いれば、原子や分子を支配するミクロな法則は、鏡のこちら側と向こう側で同じ法則に従うようになることが説明されています。つまり、自然法則（＝神様）は我々が住む三次元空間にさらに時間の次元、粒子・反粒子の次元を加えた観点から見れば対称的であると言えるということです。この物理的時空の対称性より、神様の前では動いている星、停まっている星、動いている電車、停まっている電車、全てが力学の法則のみならず光の法則（光の伝搬速度）においても平等であるというアインシュタインの相対性原理に行き着きます。電車の真ん中から光を前後に放射して一番前と一番後ろとで光の到着時刻を観測する仮想実験では、電車に乗っている人から見ると前後に同時に光が到着するが、外から電車の中を覗いている人から見ると後ろの方に早く到着することになり、電車に乗っている人の言う同時刻と外から電車の中を覗いている人の同時刻が違うということて

す。目で見える世界から考えると非常識な考え方で  
すよね。

次の「素粒子は粒子であるか」の章では、まず、  
電子・陽子・中性子・中間子などの素粒子が、常識  
的な古い「粒子像」と異なっている点がまとめてあ  
ります。自己同一性をもっていない、位置と運動量  
とを二つ一緒に定められない（運動の道筋を持つこ  
とはできない点）、といったことです。つづいて、  
このように非常識な粒子の行動を「量子力学」では  
どのような手法で記述しているかが簡単に説明して  
あり、空間の無数の点をベクトル空間内の軸に対応  
させ、状態ベクトルはどの軸にも向いてない場合、  
いろいろな場所に一緒に存在すると考えなければなら  
ないと述べられています。量子力学の世界の摩訶  
不思議な状況が、電光掲示板や波の干渉実験などを  
用いて、非常に分かり易く述べてあります。

最後の「光子の裁判」の章では、現実の世界では  
理解しづらい光の粒子性と波動性の二面性につい

て、光子を被告にした法廷サスペンスさながらの物  
語として描いてあります。なんともユニークです。  
一つの光源から出た光が、二つのスリットを通過  
し、その後方のついたて上に干渉縞を作るというこ  
とは、光が波であることの証明ですが、光が不可分  
の粒子「光子」の流れであることも考えなければなら  
ない事実があります。不可分にして、しかも2つ  
の窓から同時に忍び込むことができるという量子的  
粒子「波乃光子」被告の自己矛盾に満ちた行動をデ  
ィラック弁護士が、従来の論理の盲点をついて、い  
かにして合理的に説明していったかという裁判劇  
となっています。

「相対論」や「量子論」は、日常知覚することとか  
け離れていて非常に理解しづらいですが、この本は  
程度が高く、かつ分かりやすいという滅多にない一  
冊です。120ページ程度で短く読みやすい本です  
ので、是非、一読することをお勧めします。

## 特集 読書のすすめ

# 読書で得られる幸福



制御情報工学科 小田 幹雄

学生の皆さんは、幼少のころから「読書をすすめら  
れる」場面に何度も出くわしたことでしょう。おそ  
らく、赤ちゃんの頃の読み聞かせを始めとして、  
「読書のすすめ」、つまり「本を読みなさい！！」  
と度々言われたことと思います。ここで「読書のす  
すすめ」を論じることは、読書家の諸君にはすでに無  
用の長物であり、読書嫌いの諸君には相変わらず受  
け入れ難い「すすめ」であることに変わりはないか  
もしれません。しかしながら、一人でも読書に目覚  
めるきっかけになればと期待しながら話を進めたい  
と思います。

先日、車を運転していると、カーラジオから「読  
書のすすめ」が流れてきました。「脳科学」という  
言葉が世間で流行していますが、「脳トレ」で有名  
な加齢医学研究所の川島教授の声でした。川島教授  
は、脳の前頭前野を鍛える、すなわち活性化するに  
は読書が一番であると語っています。  
前頭前野が鍛えられると、意欲や発想力、さらに感  
情の抑制能力が発達します。例えば、インターネット  
のハイパーテキストは、厚薄はともかく知識は身  
に付きますが、前頭前野は鍛えられません。活字で  
はない画像の情報が多すぎるからです。画像の情報

が含まれると、途端に脳の活性が低下します。それでは、どのような読書が脳を鍛えるのでしょうか？心に染み入る小説、ユーモアのある随筆などを読むことにより、人間の心理状態や世の無常を仮想体験し、感情や知識データベースが前頭前野に記憶として構築されます。単なる情報蓄積にとどまらず、前頭前野の働きが活性化し、意欲が増進し、発想能力が向上し、感情抑制が十分機能するということなのです。人とのコミュニケーション能力が単なる知識を超えて醸成されます。私は学科の就職担当をしていますが、面接試験におけるコミュニケーション能力の重要性を切実に感じます。この能力は、一朝一夕には身に付かず、まさに日々の読書の積み重ねにより形成されるものと思います。

さらに、川島教授は、楽しい事に対して脳はあまり働かず、脳を働かせようとすると物事がつまらなくなると語っています。このことが、読書嫌いの者にとって、読書が受け入れ難い「すすめ」であることを端的に表していると思います。読書は、能動的で忍耐力が必要で、難解なときは挫折することもあるかもしれません。しかし、このようなときに脳が鍛

えられているのです。そして、読書力も次第に養われ、苦痛と正反対に、読書からしか得られない「幸福感」を感じるようになるでしょう。

読書から得られる「幸福感」といえば、フランスの作家ダニエル・ペナック氏は、「ペナック先生の愉快的読書法」の中で、「愛する」や「夢を見る」と並んで、この「読む」という動詞は、命令形への嫌悪感を共有していると述べています。つまり、読書は強要されるものではないということです。

【ペナック先生の「読書の権利10ヶ条」】

1. 読まない権利、2. 飛ばし読みする権利、3. 最後まで読まない権利、4. 読み返す権利、5. 手当たり次第に何でも読む権利、6. ボヴァリズム（主人公になりきる）の権利、7. どこでも読んでいい権利、8. あちこち拾い読みする権利、9. 声に出して読む権利、10. 黙っている権利

〈読書の時間は、愛する時間と同じように、人生の時間を広げる。読書は社会の時間の構造に属さない。それは愛と同じで一つのあり方だ。〉

最後に、自らの意思で選んだ一冊が、読書で得られる幸福に繋がることを願っています。

## 特集 読書のすすめ

# 十代後半の頃の読書



生物応用化学科 松田 貴暁

いつ頃から読書の習慣がついたのか正確にはわからない。十代後半であったと思う。何故読書の習慣がついたかは明確で、その頃私は電車通学を行っていた。片道四十分の読書はいつしか代え難い時間と思えるようになっていった。

その頃手にした本は購入したり親から借りたり或いは図書館で借りたものだが、購入したものは古本の文庫本が圧倒的に多い。当時は新古書店のチェーン

店が街に出始めた頃で、古本の文庫本一冊が50円から200円程度で手に入る新古書店へ学校の帰り道に通っていた事が懐かしく思われる。これらの本は車内で読まれるべくカバンに無造作に放り込まれるか窮屈にねじ込まれるかの過程とその後の時間を経た今、日に焼け、手垢で黒ずみ、破れた背表紙をセロテープで補強してあったりと異形であるが、その頃の自分を陰に陽に支えてくれた本自身に強い愛着

を感じる。

理想的な研究者・技術者像の一つとして「T型成長」とか類似の表現を聞く事がある。これは「幅広い分野について確固とした基礎知識・技術（Tの横線）を持ち、そのうえに一分野については高度な専門知識・技術を有する（Tの縦線）」という様な意味である。読書の場合も同じ様な事が言えそうで、様々な分野の本を全体的に広く浅く読む事と、ある分野或いはある作家の作品を重点的に読む事とがそれに当たるかと思う。十代後半頃の私の場合は、自分の好きな分野の本を読み、そこから関心を持ったものについても読んでいき、興味を持った分野や作品を核としてその周りについて広く浅く手を伸ばしてみる様な読書スタイルであったようだ。

本稿は読書のすすめについてである。学生さんの参考になるか分明ではないが、自分の十代後半の頃の読書について考えてみる事にした。私の場合、上の意味で核となる分野の一つは歴史小説であった。前出の文庫本をみると半分は歴史小説のそれで、これらはある種の一貫性（作家であるとか、人物・時代であるとか）をもって当時選択していった過程が把握できる。歴史小説を好む事は今も変わらないし、何故好むのかも当時から変わっていない。「棺を覆うて初めて定まる」と言うが、私にとっては死人の生き様の方がよほど確かだからだ。価値観が目まぐるしく変化する今日では、棺を覆う頃にはその人の声価は忘れ去られる事が少なくなく、であればこそ、長い歴史の中で己の志に殉じて死んでいった者達の矜持の方が確かだからである。歴史と断絶してこの世に存在する事は私にとってはなにやら腹に力が入らず頼りなく寂しい。

残りの半分の文庫本、これはもう多種雑多である。こちらは散発的に読んだものの集合体だが、そのせいか読んだ季節や状況を鮮明に覚えていたりして奇

妙なものである。例えば『雪国』/川端康成を件の新古書店で手にして「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」と読み始めたのは真夏の電車の中であった。以来、真夏が来るとこの薄く古い文庫本の『雪国』に手が伸びる。私の中の『雪国』は蝉の声と切り離せない。読書が個人的な作業であり、その中で作品や本へ読書当時の出来事や思い出がリンクされ、それが個々人で異なるところもまた読書の一つの面白味かとも思う。

本校の学生さんは正しく十代後半の真っ只中。

「学生」という字を「学びに生きる者」と文字通りに考えれば、学生とは自分自身を多面的に摸索する時間を社会から与えてもらっている存在だと思う。支えてくれる社会や家族に感謝しつつ、乱脈な十代後半を通じてどうやって自分自身にめぐり会う事ができるのか。その摸索の中で様々な事に挑戦してもらいたいが、その意味からも読書については確実にお勧めする。十代後半の頃に、ある程度に人生に関して自分自身の考えの様なものを十代後半なりにぼんやりと構想する事が大切であると思うからだ。それには先ずは日常生活の中に自分を見ていく事が第一で、学校生活を全うすればいい。ではただ生活すればそれでいいかという恐らくはそうではない。生活しながら、様々な人々がどういう風に人生を見たかを知る事が大切だと思う。それには読書が有効であるし必要だ。どんな作品にせよ、そこにはある人生観を持った作家のそれが織り込んである。読書はそんな作者との対話であり、個々の読者は本を介して自分自身と対面・対峙する機会を得られる。学生さんは恐らく読む人と殆ど読まない人に二極化しているかと思うが、読書に興味のない学生さんには、まずは何か自分の好きなジャンルであるとか作家であるとかを見つけてほしい。先ずは読んでみる事だ。そこから世界は確実に広がるのだから。



## 創造の世界へ

材料工学科 周 致 霆

僕はいろいろなことに興味がある。食べること・体を動かすこと（一人でやるマラソン等は苦手であるが!）・旅行などなど、すべて好きである。でも、すべてをすることはできない……。そんな時、僕の欲求を軽減してくれるもの、それが本である。

本といっても様々なジャンル（ここでいうジャンルは、ノンフィクション・SF小説といった本の内容に対するものではない）があり、小説・教科書・情報誌・漫画といったものがある。僕は毎日の生活の中で今の自分に合った本を読む。

どうということかという、研究で分からないことがあれば、僕は教科書・論文等を読む。今の世の中インターネットという便利なツールがあるため、すぐインターネットに頼るとい人が多いと思う。しかし、インターネットを利用するという事は検索1発で結果（正しい結果とは限らない）を出すということは頭で考えることが極端に減るということで大変勿体無いことをしていると思う。与えられた課題の中で分からないことを普通に調べるとどれだけ得るものがあるか。知っているキーワードからその分野の教科書を探し、教科書の中からの確に自身の知りたいことを見つけ出す。もちろん1発で目的の内容の本を見つけ出すことは出来ないと思うが、間違った教科書（必要な情報のないもの）の中にも大変ためになる情報が含まれている。そうやって思っても見ないところで新しい知識を得てくるのではないだろうか？調べるということは、まるで自身が探偵になって犯人を探し出すようなわくわく感をおぼえないか？

もちろん僕は、日々教科書・論文なんて読むこと

はしていない、というかできない。文頭にも書いたが、小説も読むし、じゃらんや地球の歩き方、福岡の食べ歩きに関する情報誌、漫画だって読む。先ほどの教科書・論文と対極の位置にあるのが漫画ではないだろうか？しかし、漫画は直接感情に影響を与える本であり、容易に人を漫画の世界に感情移入することができる。それは、絵があるからだ。情景も浮かびやすいし、様々なシチュエーションが身近に感じられる。なんて素晴らしいのだ！

でも、僕の大好きな本は上記の分野でなく、実は情報誌である。小説の素晴らしさはみんな分かっていると思うので、ここでは割愛させて頂き、残りを「僕と情報誌」ということで話を進めさせて頂く。まず、地球の歩き方であるが、約2000円で地球の各地にいけると考えるとなんとお買い得であろうか！毎ページを1枚1枚読んでいく、あの白黒のページが僕の脳内では鮮明な映像となって流れていく。僕はもうその国にいるのだ。次はどこの施設に行こうかなんて考えながら1時間2時間と時間がたっていく。うーんお腹がすいたなと思ってくると待ちに待ったお食事タイム。いい香りが脳内に充満しどのお店も僕を誘惑する。これもいいけどあっちのお店もいいな〜と贅沢に悩み後ろ髪を引かれつつ今日の宿へ。この部屋贅沢だな、でも高いや。お！ここは手ごろだし宿もきれいだ。ここに泊まっちゃおうかな〜。これで、リアル2〜3時間がたってしまう。しかもただの1都市でこれである。1冊読むには優に2ヶ月はかかる。旅行、もちろん行くのが一番良いのだが、本でも十分行った気になる。面白いことに、初めて行ったシンガポール、なにも知らないはずなのに、なんか初めて行った気にはならなか

った。知らない道を闊歩しても不安はない、すごく不思議な気持ち、でも大変心地よい。これは中学校の頃の体験。そう、僕は昔から妄想が大好きだった。

以上のようにどんな本にもそれぞれ素晴らしい世界があり、本を読むってこと自体が我々の心に素晴らしい風を運んでくれることだと思って頂けたら

うか？でもね、心の栄養素であるといえる本、きちんとバランスよく摂取するように！創造力万歳！！備考（自身の本の所持数）

教科書 約30冊、論文 約200報、小説 約150冊、情報誌 約20冊、漫画 約1000冊 あれ？バランスが・・・

## 特集 読書のすすめ

# このままクルマに乗り続けていいのか —『レスター・ブラウン・プランB2.0』を読んで—



一般文科

岡本 和也

本稿は、現在クルマに乗っている人やあるいは今後乗ろうとしている人、つまりほぼすべての読者が対象としており、「文明崩壊」を回避するために、少しでもクルマに乗ることを控えようと訴えるものである。

経済学者宇沢弘文は、クルマを運転するという行為は、自らの欲望を追及し、その費用を負担せず、他人の自由を阻害する行為であると指摘している。その著書で彼は、横断歩道橋を日本社会の非人間性を象徴したものと指摘する。歩行者が上り下りをしなければならぬことが当然とされており、町がいかにもクルマ中心に設計されているかを示しているからである。宇沢のこの著作は1974年に出版されたものであるが、いまだに色あせていない良本である。読んでいない方は是非読んでいただきたい。このままクルマに乗り続けていいのか迷うはずである。

さて本稿で取り上げるのは宇沢ではなく、環境学者レスター・ブラウンの著作である。本書は現在の化石燃料依存型でクルマ中心の使い捨て経済から、風力などの再生可能エネルギー源に基づき、鉄道や自転車を活用したクルマへの依存度が低い新たな経済モデルへの切り替えを訴えるものである。人類全体

の需要が初めて地球の再生能力を超えたのは1980年ごろだとされている。それまでは森林、地下水、動物など地球上にある自然資産そのものに関して、いわば資産が生む利子を消費していたにすぎなかったが、1980年頃以降は資産そのものを消費するようになったという。その先に衰退や崩壊があるのは当然である。

本書にはその典型的な事例が紹介されている。それは、第二次世界大戦中にアメリカの沿岸警備隊が、ベーリング海の孤島のセント・マシュー島に配属されていた警備兵19名の非常用食料として、その島にトナカイを29頭連れてきたことを発端とする。大戦後その基地は閉鎖され、警備兵は島を去った。その後、1957年に生物学者がこの島を訪れていた時は、トナカイが1350頭に増えており、コケを餌にしているような状態であったという。続く1963年には6000頭に増えていた。トナカイを襲う捕食動物がいないため、頭数が爆発的に増えたのである。しかし、1966年のこの島には、トナカイの骨がごろごろ転がっており、トナカイは50頭も生き残っていなかった。そしてトナカイは1980年ごろまでに絶滅したという。



これが自然の恵みを過度に消費した結果である。このセント・マシュー島におけるトナカイの運命が、現在の地球における人間の運命を示唆していることを、もはや否定できるような現状ではなかろう。この環境問題という大きなテーマに関して、ここで再びクルマに乗るといった日常的な行為について考えてみたい。

バイオ燃料の登場で、クルマに乗る富裕層と食料不足に苦しむ貧困層が、限られた食料を奪い合う社会となったとブラウンは指摘している。極論であるが、いま目の前にあるクルマに乗るといった行為は、飢餓に苦しんでいる世界中の誰かの食料を消費することを意味しているとも言えるだろう。確かにクルマの効用はとてつもなく大きい。現代社会がクルマ無しでは成り立たないことは周知の事実である。しかし、クルマのもたらすメリットからではなく、デメリットから考えなければならない現状にあること

は間違いない。

そのため、クルマに乗ることを少しでも控えていくべきではなかろうか。自転車先進国のオランダでは、2001年の税制改革で自転車通勤奨励策が取られた結果、実に4分の1の人々が自転車通勤をしているという。確かにオランダは、国土がおおむね平坦であるため、自転車の利用に適している。しかし、そのような地理的条件にかかわらず、世界中がこういった取り組みを参考にしなければならないだろう。また、国単位だけではなく、個々人の日常的な取り組みが求められていよう。

環境問題は非常に大きなテーマである。しかし、身近なところではクルマに乗ることを控える、例えばクルマ通勤の回数を減らすというところから対応できる。かくいう私もクルマ通勤者であり、本稿を執筆することによって、自分自身が少しでも自転車で通勤するようになりたいと思う。

- 
1. レスター・ブラウン著、寺島実郎監訳『レスター・ブラウン・プランB2.0—エコ・エコノミーをめざして』ワールドウォッチジャパン, 2006. (参考: ジャレド・ダイヤモンド著、楡井浩一訳『文明崩壊 滅亡と存続の要因を分けるもの』上・下, 草思社, 2005.)
  2. 宇沢弘文『自動車の社会的費用』岩波書店, 1974. (参考: 宇沢弘文『社会的共通資本』岩波新書, 2000.)
  3. 本書 vii-viii頁.
  4. 本書 7-8頁.

# 私の一冊



武田 鉄矢作 小山 ゆう画  
お〜い！竜馬

小学館

時は幕末。世界の荒波にさらされ、弱々しく崩れ去っていく江戸幕府。そんな中、真に国を思い、日本の明日のために立ち上がった男がいました。彼の名は坂本竜馬。この本では、そんな激動の時代を駆け抜けた坂本竜馬の成長や、同志たちとの出会い、そして別れを史実をもとにドラマチックに描いています。幕府・西欧列国という巨大な敵を相手に、「日本を守る」その志を胸に戦う若者たち。時には笑え、時には泣け、そして最後には必ず熱くなれるこの本を読めば、自分も何か大きなことをしなくては！という気持ちになるはず。さあ、今こそ日本の未来のために戦うぜよ！！

(機械工学科 5年 筒井裕作)

奈須 きのこ著

DDD

講談社

皆さんは「ライトノベル」という言葉をご存知でしょうか。小説というと、とっつきにくいもの考える方もいるかもしれませんが。私も昔はそう思っていたのですが、ライトノベルは、小説でありながら色々なサブカルチャーとメディアミックスし、まるで漫画を読むような感覚で文章を楽しむことのできる新しい分野です。その中で私が最近、最も興味を持った作品が「DDD」です。大筋は、隻腕の青年石杖所在が悪魔憑きと呼ばれるアゴニスト異常症により超能力を得た者たちの暴走をとめるべく活躍する、という読まなければ理解不能な独自奇抜な世界の内で、更に驚きの連続という展開は、読み返す度に衝撃が帰還する様でした。

(電気電子工学科5年 塚本和寛)

ブルック・ニューマン作 五木 寛之訳  
Little Tern

集英社

誰でも一度はこういった経験があるのではないのでしょうか。「目標に向かって全力疾走しているのに、突然それに嫌気がさしてしまう。」、「精一杯頑張っているのに、全く報われない。そもそも何故、頑張っているのだろうか？」

この本はそんな挫折をしたり、今まさに目標を失いかけている人に勧めたい本です。

この本の主人公はアジサシ(Little Tern)という鳥です。この鳥がある日「飛ぶ」という、自分にとって存在意義に等しいものを見失い、そこからこの鳥の自分探しの旅が始まります。

(制御情報工学科4年 真崎 浩)

池澤 夏樹著

楽しい終末

文藝春秋

著者の他の作品として、「スティル・ライフ」「真昼のプリノウス」「骨は珊瑚、眼は真珠」などの小説があります。元々著者は詩人なので文章表現などは詩的で綺麗なのですが、あまりに突拍子もない発想が突然現れるので最初は著者の真意が読み取り難いかもしれません。この「楽しい終末」では著者の考えが直接的に書かれているのでどのような考えの下に小説を書いたのかが理解しやすいと思います。内容は終末論(人類の最後)について、その原因となるものや過去にどのような終末論が想像されてきたかなどが書かれています。悲観的なテーマを扱っていますが、最後は気長でのんびりとした書き終わりになっています。

(生物応用化学科4年 養田真昂)

的川 泰宣著

### 月をめざした二人の科学者

中央公論新社

誰もが一度は聞いた事があるでしょう、アポロとスポーツニクスという名を。この名前に代表される宇宙開発競争には、フォン・ブラウンとコロリョフという二人の偉大な存在があったのです。

この本は永遠のライバルであった二人の一生と米ソの宇宙開発の栄光と挫折を記録したものです。世界初の人工衛星の打上げと有人宇宙飛行により優位に立っていたソ連がアメリカの追撃によって逆転される過程は胸を打つものがあります。アポロ計画の成功によって結着は付くのですが、もしこの対称的な二人の立場が逆であったとしたら勝敗はどうなっていたら考えさせられました。

(材料工学科4年 溝上智久)

森 絵都著

### DIVE!!

講談社

ダイビングスクールに通う知季は、ある日夏陽子と出会い、飛び込みの本当の面白さに気づかされた。そして経営の傾いたダイビングスクールを立て直すために、飛び込み選手だった両親を持つ要一、津軽の海の岸壁でダイブをしていた飛沫と共にオリンピックを目指す。辛い食事制限や筋トレ、飛び込みの練習などで自分のやりたいことができなくても、ひたむきに頑張る知季たちの姿に心を動かされます。高さ10mの飛び込み台から時速60kmでダイブして、わずか1.4秒の空中演技の正確さと美しさを競うという飛び込みのシーンがリアルで魅力的に描かれていて作品に入りやすく、読みやすくなっています。

(専攻科2年物質工学専攻 原千香子・宮嶋有功子)

## リレー連載

# 天気図を読む

機械工学科

石丸 良平

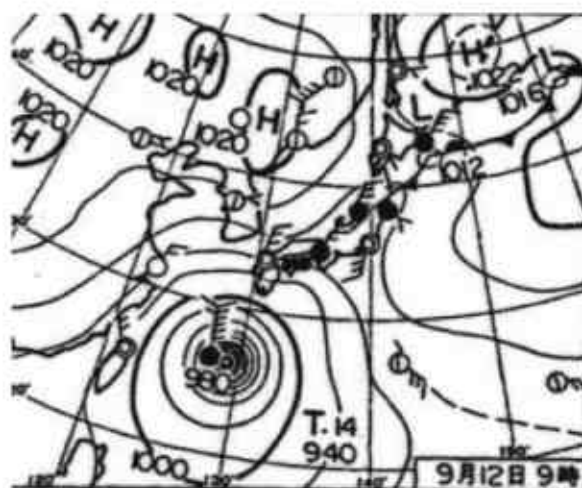
前号では小宮先生が「教科書を読む」というタイトルで執筆されました。リレー連載ということですので何かしら受け継がないといけないと思うのですが、教科書以外の本を全くと言っていいほど読まない私にはいい材料が見あたりません。そこで、今回は「読む」をリレーし「天気図を読む」とさせて頂きました。天気は日常生活をする上でもっとも身近な話題であり、テレビや新聞・インターネットなどで毎日必ずといっていいほど目にします。まず、天気予報の歴史を遡ってみたいと思います。

日本で初めての気象観測は、1872年(明治5年)に北海道で開拓使による函館気候測候所が設立され、気象観測が行われたのが最初といわれています。その3年後の1875年6月1日、東京赤坂に東京気象台が設立され地震

観測と1日3回の気象観測を開始しました。この6月1日が現在では「気象記念日」とされています。わが国初めての天気図は、1883年(明治16年)2月16日、全国11ヶ所の測候所から電報でデータを集めドイツ人の指導により東京気象台が作成しました。この日を替では「天気図記念日」と呼んでいます。その年の3月1日から天気図は毎日作成されるようになり、鉄道の駅などに掲示されて、一般の人の目にも触れるようになりました。今では新聞やテレビでおなじみの天気図も当時は非常に珍しいものだったようです。さらに翌年6月1日には毎日3回の全国の天気予報の発表が始まりました。日本で初めての天気予報は「全国一般、風の向きは定まりなし、天気は変わり易し、但し雨天勝ち」とのことです。今だったら張り倒されそうな天気予報ですが、当時としては画

期的なことだったと思います。時代は進み、1924年（大正13年）8月21日に初めて天気図が新聞に掲載され、翌年3月22日にはラジオによる天気予報が開始されました。テレビによる天気予報は1953年（昭和28年）2月1日から、また、2002年（平成14年）8月8日からインターネットによる気象庁からの気象情報の提供が開始されました。

さて、私は子供の頃から台風が大好きで、こんな事を言うと被害に遭われた方には大変申し訳ないのですが、いまだに台風がやって来るとワクワクします。何が楽し



いかというと、テレビが特別番組になり台風中継を始めること、最近は少なくなりましたが停電になることです。幼少の頃、ローソクの灯りで食卓を囲み不安ながらも楽しかった思い出があります。ただ悲しいことに台風

は多くの人的・物的被害を出します。昭和の時代で死者が3,000名を超えた台風を「昭和の三大台風」と呼んでいます。死者・行方不明者が5,098名にのぼった伊勢湾台風（昭和34年）、3,756名の枕崎台風（昭和20年）、3,036名の室戸台風（昭和9年）がそれぞれです。枕崎台風、室戸台風の時はラジオ、伊勢湾台風の時はテレビによる天気予報があったものの多くの被害が出ました。建物、護岸設備などがまだ不備な時代でありましたし、天気予報があったとはいえ今のように1時間毎に台風情報が手にはいるわけでもなく、おそらく天気図も多くの人には目にしていなかったのではないかと思います。

記録に残っている中でもっとも多く被害を出した台風は1828年（文政11年）の約1万人の死者を出した「シーボルト台風」といわれています。九州西部に上陸した時の中心気圧は900hPa、最大風速は50m/sと推定されています。さらに、記録が定かではありませんが二度の襲来を受けた元寇で、文永の役（1274年）では13,500人、弘安の役（1281年）では約7万人が暴風により犠牲になったとされています。この暴風が台風によるものなのか低気圧によるものなのか、あるいは本当に暴風が吹いたのが議論が分かれるところですが、昭和初期頃からこの暴風を「神風」と呼ぶようになったようです。もしも元寇の時代に天気予報があれば、今の日本はずいぶん変わっていた、いえ、存在していないのかもしれない。その当時の天気図があれば読んでみたいですね。

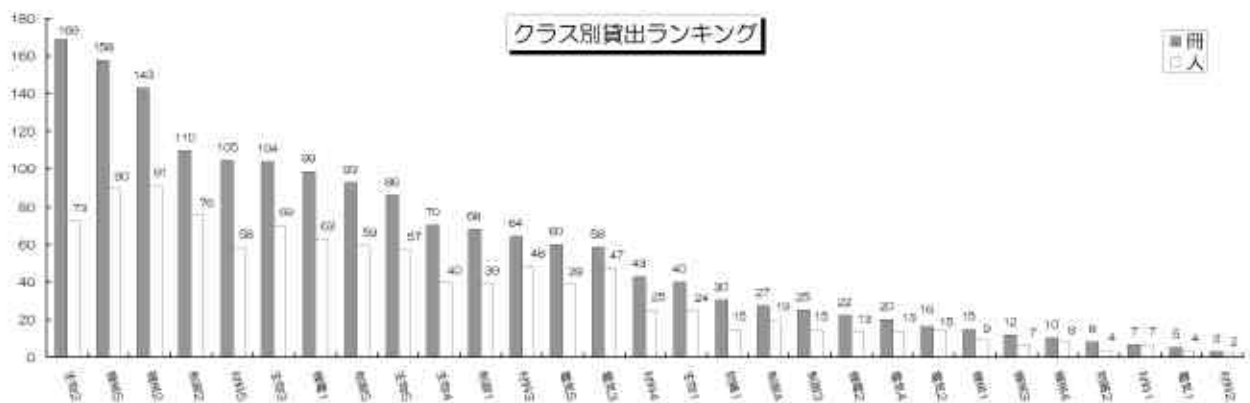
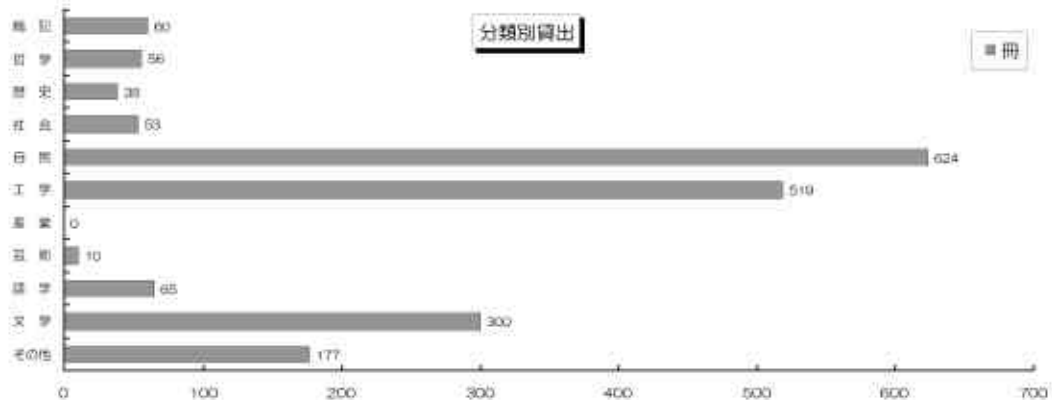
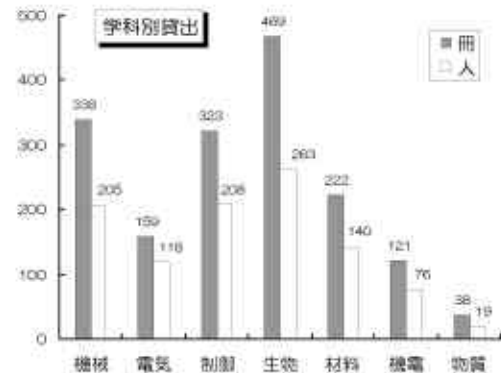
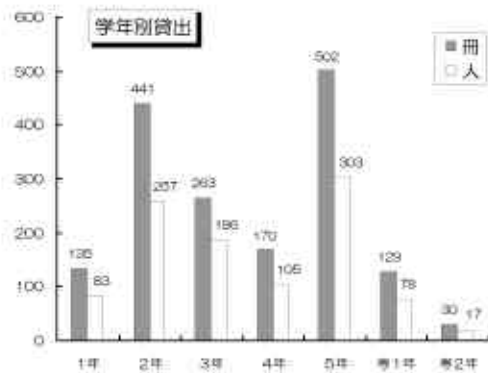
参考：気象庁ホームページ

## 平成18年度図書館利用状況

### ◆開館日数及び入館者数

月	開館日数	入館者数				一般利用者数 (内数)	一日平均入館者数 (四捨五入)	開館時間
		平日		土曜日	合計			
		時間内	時間外					
10	25	2,993	391	116	3,500	18	140	※平日(時間内)9時~17時
11	24	3,125	680	165	3,970	15	165	※平日(時間外)17時~20時
12	22	2,598	313	65	2,976	12	135	※土曜日17時~20時
1	21	3,274	715	86	4,075	22	194	
2	23	2,872	479	135	3,486	17	152	
3	23	1,356	128	49	1,533	23	67	
合計	138	16,218	2,706	616	19,540	107	142	

### ◆図書貸出状況



# Information

下記のとおりお知らせいたします。開館時間の変更及び臨時閉館にはご注意ください。



## ◆特別(長期)貸出について

夏季休業中の特別(長期)貸出を下記のとおり行います。

- ・貸出期間：7月13日(金)から8月22日まで
- ・返却期日：8月29日(水)
- ・貸出冊数：5冊以内

※一般利用者及び教職員は通常貸出です。

## ◆開館時間の変更及び休館日について

7月21日(土)から8月31日(金)までは、下記のとおりです。

- ・月曜日～金曜日は、9時から17時まで開館
- ・土、日曜、祝日及び8月13日から15日(水)までは休館です。

## ◆図書館からのお願い ◆◆◆

閲覧・開架室内での、飲食・携帯電話の使用・騒がしい行為や雑談は禁止です。・・・ご協力の程よろしくお願いします。

第四

### 《編集後記》

先日知人の国語教師から言われた一言：「本、読んでもないのに、なぜかドキッとしました。別に悪いことをしているわけでもないのに。  
(忙しくてそんな暇なんて・・・)  
すかさず頭の中を言い訳がよぎります。  
さらに増幅する罪悪感。

仕事に必要な本以外、ほとんど読書に時間をかけることがなくなってしまった今日この頃。

何の因果か、本を読まない人間が本を読んでもらうための宣伝の仕事をしています。でも、そんな自分だからこそ自信を持って言えるのかもしれませんが、学生時代にどしどし本を読みなさい、と。

(キマった!?)

今回から図書館だよりの編集を生物応用化学科の茂木先生とともに担当することになりました。よろしくお願いたします。

(図書主幹 中坊 滋一)

発行日：平成19年7月11日

発行・編集：久留米工業高等専門学校図書館 Tel：0942-35-9306 Fax:0942-35-9307  
〒830-8555 久留米市小森野一丁目1番1号 E-mail:L-staff.GAD@ONKurume-nct.ac.jp